所 員 自 著 紹 介

1. 孫安石・大里浩秋（編著）『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』
　　東方書店，2022 年 3 月

本書は，明治，大正，昭和における中国人留学生の活動についての論考 15 編を収録している。1905 年を前後した一時期だけでも 5 万人を超える中国人留学生が日本に滞在していたと言われているが，これほど多くの中国人留学生が一つの国，または地域で学業に従事したことは極めて特異な事例であると言える。「第Ⅰ部　明治期の留学開始の諸相」に収めた 6 編は，いずれも明治期の，中国人留学生と日本との関係が開始される時期を取り扱っている。「第Ⅱ部　大正・昭和期の受け入れ側の諸相」の 4 編では，大正から昭和期にかけて中国人留学生を受け入れた日本側の各学会と教育機関などの諸相を取り上げている。「第Ⅲ部　日中戦争期と戦後の留学生の諸相」は，日中戦争期と戦後に至る時期の中国人留学生の活躍と戦争を挟んだ時期の歪みの諸相を取り上げる論文 5 編を収めている。以下，本書の具体的な構成を示す。

<u>第Ⅰ部　明治期の留学開始の諸相</u>
　章宗祥編『日本遊学指南』を読む（孫安石）
　清国留学生と『訳書彙編』の発行 ── 創刊と財政，販売を中心に（郭夢垚）
　寺尾亨の東斌学堂と留日学生 ── 『向巖家書』を中心資料として（王鼎）
　正則英語学校と清末の中国人留学生（川尻文彦）
　清末期蚕業留日学生と中国蚕糸業会（東京）（王怡然）
　清末の旗人留日学生 ── 『大同報』を中心に（阿部由美子）
<u>第Ⅱ部　大正・昭和期の受け入れ側の諸相</u>
　日華学会の中国における活動 ── 北京駐在員高橋君平の事例を中心に（陳珂琳）
　同仁会による留日医薬留学生の支援（見城悌治）
　東京帝国大学の中国人留学生関係文書を読む（大里浩秋）
　東京工業大学と戦前の中国人留学生（佐藤由利子・村松晶子）
<u>第Ⅲ部　日中戦争期と戦後の留学生の諸相</u>
　中国人の日本留学と「日本研究」── 団体と雑誌を中心に（高柳峻秀）
　朱紹文研究員と戦時下の日本留学 ── 高特設高等科と東大経済学部を中心に（田島俊雄）
　モンゴル喇嘛僧の日本留学 ── 真言宗と浄土宗を中心に（池田健雄）
　中国留日同学会とその活動 ── 『中国留日同学会　季刊』に見る（川島真）
　中国留日同学総会の財務状況の考察（荒川雪）

2. 鈴木宏枝『アフリカン・アメリカン児童文学を読む ── 子どもの本という「励まし」』
青弓社，2022 年 2 月，240 頁

本書は，これまで積極的に扱われることの少なかったアフリカン・アメリカン児童文学について，その歴史と特質をまとめたものである。一般のアフリカン・アメリカン文学は，奴隷制や人種差別の過酷さに重心が置かれ，絶望や諦念が強調される。だが，児童文学は子ども読者を対象にすることで希望を語り，アフリカン・アメリカン文化に内包される「生きのびる力」をすくいあげて自己実現への「励まし」を描ける。また，そのメッセージは他の多様なマイノリティにも届きうる。

序章と「おわりに」を除く章立ては以下の通りである。

第 1 章　アメリカのなかの他者
第 2 章　アフリカン・アメリカン児童文学の輪郭
第 3 章 「ブラウニーズ・ブック」の意義
第 4 章 「わたしには夢がある」への応答
第 5 章　歴史の受容
第 6 章　ネットワークの形成
第 7 章　言葉の力

第 1 章で『アンクル・トムの小屋』の抄録版や演劇版の黒人像が示す文化的アイコンがアフリカン・アメリカンの子どもへの「励まし」にならないことを批判した上で，第 2 章で「励まし」となりうるテキストの萌芽と展開を概観した。第 3 章以下で，アフリカン・アメリカンの子どもが本の中にポジティブな自画像を見いだせるよう，ハーレム・ルネッサンス期の冊子「ブラウニーズ・ブック」や，公民権運動以降のテイラー，ハミルトン，マイヤーズらの作家が何を試みてきたかについて文化との関係を軸に詳細な作品分析をおこなった。

3. 中村隆文『組織マネジメントの社会哲学 ── ビジネスにおける合理性を問い直す ──』
ナカニシヤ出版，2022 年 3 月，202 頁

「ビジネスにおいて哲学は不可欠だ」と昨今いわれるが，その場合の「哲学」というのは，経営者の理念であったり，あるいは，ブレインストーミング的な思考法を意味する場合が多い。しかし，それを社員が共有・実践するだけで仕事がうまくいったり，職場が働きやすくなることはほとんどないであろう。というのも，そこでは，自分たちがどういったものを欲し，どういったものを忌避しているのか，そして，周囲の同僚や顧客が何を求め，何を忌避しているのかということを知るような，いわば人間理解に欠けているからである。「哲学」の出発点が己を知ろうとすることである以上，人間理解をおろそかにすべきではない。人間があつまる会社・企業がうまく機能するためにもその理解に基づいた組織運営というものを考えてゆく必要があるだろう。

本書は，哲学思想に加え，認知心理学や行動経済学の知見を活かし，人間の行動・思考パターンや，倫理観の分析を行うものである。しかし，単なる学術的知見を羅列するのではなく，それをある一つの哲学的概念のもとに集約しながら，契約でもなく強制でもない，倫理的かつ営利的な感覚の共有のもとで「ともに働くこと」「ともに栄えること」への方策を打ち出してゆく。その鍵となるのが，「コンヴェンション convention」である。

4. 中村隆文『物語　スコットランドの歴史』
　　中央公論新社，2022 年 5 月，250 頁

イギリスといえば，おそらくは多くの人が，ロンドンを中心としたイングランド的なものを思い浮かべるであろう。とりわけ，日本の中等教育の西洋史では，イギリスの歴史＝イングランドの歴史として語られることが多い。しかし，同じブリテン島にありながら，イングランドとは異なる国家として（しかも先に王朝が成立した国家として）スコットランドは重要なポジションにあった。

スコットランドの王であるジェイムズ 6 世が 1603 年にイングランド王ジェイムズ 1 世になったこと，イングランド内戦や清教徒革命においてスコットランドが関与したこと，さらには，名誉革命やハノーヴァー朝成立以降，ジャコバイトと呼ばれるスコットランド人たちがイングランドまで攻め込んだことは，当時のブリテン島において大きな事件であった。そうした歴史の延長として，1999 年のスコットランド議会および自治政府の発足（復活），そして，スコットランド国民党（SNP）からの首相選出，ひいては，2014 年の，イギリスからの独立を問うスコットランド住民投票が行われたのであって，現在のイギリスの政局や問題点を知るうえでも，スコットランドの歴史について学ぶことは重要な意義をもつものと思われる。

本書は，政治史だけでなく，教育や宗教，文学など，さまざまな角度から「スコットランド」を浮き彫りにすることで，それがイギリスにおいて独自の文化的アイデンティティを有したものであることを論じるものである。

5. 深沢徹『「この国のかたち」を求めて ── リベラル・主権・言語 ──』
　　武蔵野書院，2022 年 5 月，217 頁

タイトルに謳った「この国のかたち」は，「はじめに」でも書いておいたように，司馬遼太郎の歴史エッセーを意識してのものである。

カバー表紙の帯封に，「ロシアによるウクライナ侵攻という事態が出来して，これはどうしても，いま「本」にしておかねばならないとのやむにやまれぬ思いにかられ，既発表のいくつかの文章を再構成するかたちで，急遽，本書を出版することとした」と記したように，歴史の歯車を逆回転させるかのような，ロシアによる今般の暴挙に応答すべく，近代国民国家としての日本の成り立ちを，あらためて振り返ることで，その行く末について思うところを述べた。

ついては，自由と民主主義に基づく近代国民国家にとって必須の成立要件と思われる，「リベラル」，「主権」，「言語」の三つの項目を掲げ，日本の在るべき姿を，過去の歴史に遡って概観しつつ，以下のような章立てのもと論を展開した。

【はじめに】　司馬の残したメッセージ
【リベラル】　第 1 章　二〇二〇年度後期「文学」シラバス
　　── 丸山眞男の長編評論「忠誠と反逆」に導かれて，日本版「リベラル」の可能性を古典テクストのうちに探る ──
【主　　権】　第 2 章 「この国のかたち」を求めて（その一）
　　──「承久の乱」を通して見る「天皇」の位置づけ ──
　　第 3 章 「この国のかたち」を求めて（その二）
　　──「大義名分論」の射程と「象徴天皇制」の行く末 ──
【言　　語】　第 4 章　英語帝国主義の傘の下で

――水村美苗『私小説 from left to right』を手がかりとして―
第5章　平成版「横書のすゝめ」
――戦後「国語改革」の申し子の立場から――
【「あとがき」に代えて】「この国」から遠く離れて
――Exile（エグザイル）・Exsodus（エクソダス）・Diaspora（ディアスポラ）――

6. 松本和也『太宰治の小説表現』
パブリック・ブレイン，2022年11月，112頁

本書は，太宰治の作品から，その小説表現のエッセンスが凝縮された「千代女」，「カチカチ山」，「女の決闘」，「春の盗賊」の4作品をピックアップし，それぞれの小説表現における工夫や仕掛け－効果に注目することで，ていねいに読み解くことを目指したものである。「はじめに　読解へのアプローチ／太宰治の小説表現」では，太宰治の慣習的な読まれ方を批判的に再検討し，印象論的な作家論の陥穽を回避しながら小説表現それ自体を読む道筋を提示した。「第1章　小説をめぐる謎を書くということ――「千代女」」では，かつて綴り方を書けた少女が，長じて「小説が書けないこと」を書くに至ったプロセスを読み解いた。「第2章　小説が語りかけるということ――「カチカチ山」」では，小説表現における対読者戦略として指示詞（シフター）の機能について分析した。「第3章　小説の批評を小説として書くこと――「女の決闘」」では，メタ・レベルの階層分析によって捉えられてきた小説表現の複雑さを，小説内作者の「書く」という行為に即して意味づけ直した。「第4章 「どろぼうに就いての物語」を語ること――「春の盗賊」」では，複雑な作中作の様相を呈した「春の盗賊」全編が，その実，「小説の筋」のアイディアであることを論じた。最後に，展望として「おわりに　太宰治の小説表現／小説を読むということ」を付した。

7. 彭国躍著『都市空間の言語生態――上海の言語景観と道路命名の歴史――』
くろしお出版，2023年2月，220頁

本書は，上海という都市に現れる書記言語の生態の歴史を記述するものであり，言語学，社会学，歴史学，図像学と人類生態学などの多分野を跨ぐトランスディシプリナリー・アプローチを導入した研究の成果集成である。本書全体の内容は第Ⅰ部「上海言語景観史」と第Ⅱ部「上海道路命名史」の二部構成となっている。第Ⅰ部の言語景観史においては，19世紀末頃から百年にわたって上海の公共空間に現れた書記言語（店頭看板，商業広告，政治スローガン，道路標示など）の実態を記述し，その多言語使用の類型を抽出・分析した上で，開港，移・植民，戦争，革命と改革などによる中国社会の変化や政治体制の変更などの社会的生態環境がいかに都市の言語景観に影響を与えたかを明らかにした。第Ⅱ部の道路命名史においては，近代上海の道路名の形成と戦争との関わり，特にアヘン戦争，アロー戦争，日中戦争，国共内戦などの地政学的環境因子が路名変更に与えた影響と，社会主義制度に変わった後の文化大革命を含むたび重なる政治，経済の政策変動が路名の変化に与えた影響などを明らかにした。
本書は，言語学を中心とする超学際研究の先駆となり，歴史言語学，対照言語学や都市言語生態の研究に新しい知見を提供することになろう。